福井の山あいに、「老人愚連隊」を標榜する団体がある。同県美山町でそば屋を営む明石五雄さん(83)らが結成した「美山あすなろ会」だ。近年もてはやされる「物わかりのいい老人」の道はあえて拒否し、「愛郷」と「直言」を掲げて、11年前からミニコミ誌の発行を続ける。町を巻き込んだ国のダム計画をはじめ、「箱もの」公共事業、首長の多選、「平成の大合併」など、故郷の行方を左右する問題に、真っ向から論陣を張る。（永井靖二）

ダム計画がくすぶる足羽川。「清流を守ろう」と、美山あすなろ会は計画の矛盾を追及した

福井・美山あすなろ会

ぼくら老人愚連隊

ダム・箱もの・合併…

ミニコミ誌通し「愛郷」「直言」

美山は福井市の南東に位置し、町の中央を足羽川の清流が貫く。平家の「隠れ里」伝説や昔ながらの焼き畑農業が残る、自然豊かな中山間地の町だ。

国道脇に、明石さんが20年前から営業するそば屋がある。近くの農家を移築した木造の奥の座敷は、時に、「怒れる老人」たちの「密談」に使われる。

会員は約30人。全員還暦を過ぎている。93年5月から会報「あすなろ新報」を発行し、約400部を同町と隣の池田町の有志や有力者に配る。巻頭にはモットーの「愛郷専心」「チクリ直言」を掲げる。「義憤を振り回すだけで世直しできるわけじゃないことは百も承知。だが、主張すべきは主張しないといかん」

会の発足当時、町は国の足羽川ダム計画に揺れていた。60年代中ごろに表面化した案では、ダムサイトは町の中央部。「必要性がない」と反対運動が続いていたが、国は着工への動きを速めていた。一方で、町は財政難をよそに、運動公園や観光施設など「箱もの」の建設を進めていた。

経費削減に身を削る自営業者として、歯止めの効かない公共事業に反感が抑えられなかった。「老人愚連隊」を名乗る同年代の仲間と、「今の町政はなっとらん」と、店で激論を交わしたのが会の起こりだった。

創刊号では、ダム容認派とされた当時の町長の施政を「前途多難だが、明るい性格と変わり身の早さで定評のある町長のこと。理詰めで考えるより、道は拓けてくるかもしれない」と、くさした。ダム建設で過疎が進んだ事例や計画の矛盾を、ことあるごとに指摘した。

明石さんは、会社を定年後、知人に頼まれて小さな建設会社の社長をしたことがある。営業で自治体を回り、発注者側が業者の生殺与奪を握る指名競争入札の矛盾を肌で感じた。住民の目にさらすことで透明度を上げようと、町の入札結果を毎号掲載している。

現在の町の懸案は、福井市などとの合併。昨年6月号で「行財政の効率化という姑息な目的のために、日本の貴重な地域を崩壊させることがあってはならない」と主張した。人口が30万に近い県庁所在地に、5千の故郷がのみ込まれる。先に結論ありきの論議に、医療や福祉が手薄になりはしないかと、心配する。

7月18日の福井豪雨で、町は床上・床下浸水303軒の被害に見舞われた。3カ月たった今も、家を失った被災者は仮設住宅で暮らし、県道や国道には崩落による片側通行が残る。車で流域を見回り、上流のスギ植林地の崩れのひどさに驚いた。なりを潜めていたダム計画が、隣町に予定地を移し、勢いを盛り返しつつあることを心配する。ダム建設を急ぐより、山を手入れし、中山間地の農業や水環境対策に目を配った施策が必要ではないかと改めて思ったという。「必要と思ったことは言い続けます。米寿百まで踊り忘れず。老人愚連隊の血はね、死ぬまで収まらんのですよ」

「あすなろ新報」の発行を続ける明石五雄さん＝いずれも福井県美山町で

これであなたも「老人愚連隊」

- ◆言いにくいことをはっきり言う
- ◆筋を通すのに遠慮しない
- ◆子孫のため長期的視点に立とう
- ◆世間的な名誉を追うべからず
- ◆若い者に迎合しない
- ◆自分だけいい格好をしない
- ◆既存の組織に頼らない

※明石さんの話を基に構成